

時速 164 km

スタルヒンの偉業

先日、日本ハム・ファイターズの大谷翔平投手が、時速 164 kmのボールを投げた。むろん日本新記録である。

かつて、全盛期の沢村栄治投手と同時代に活躍した選手を打席に立たせ、ピッチングマシンで速球を投げさせたことがある。で、多くの選手が「このくらい」といったボールの速さが、奇しくも 164 kmだった。この当時、150 km台のボールを投げる投手がほとんどいなかった時代である。改めて沢村栄治投手のすごさを認識させた。

ところで、一方では、当時を知る人の話で、「いい時と悪い時とがあるから、沢村が一番とは言い難い」という説もある。沢村が一躍脚光を浴びたのは、ベイブ・ルースやルー・ゲーリッグを中心としたヤンキースを相手にわずか 1 点に抑えた試合があることからであるが、それまでの試合では、結構打たれているのである。昭和 9 年、まだ日本にはプロ野球がない時代である。全国から選手をかき集め、最年少だったのが、沢村栄治とスタルヒンであった。

じつをいうと沢村の球速についての記録はない。スタルヒンの記録は、のこされたフィルムから 153 kmとされている。ただし、心身ともに絶好調だったかどうかについてはわからない。つまり最速のボールだったかどうかわからない。少なくとも当時としては群を抜いていることだけは間違いない。戦争のために野球ができなくなるまで 9 年間、巨人軍に在籍し 199 勝をあげている。1939 年と 1940 年の 2 年間で 80 勝をあげている。ある人の言うことには、沢村がスタルヒンと並んで投球練習をするのを嫌がった、という話もあって、これらを総合すると、スタルヒンのほうが速かったのではないか、という結論が得られる。沢村栄治の剛速球を否定するものではないが、鼻肩の引き倒しも失礼だろう。球の重さやキレもある。

スタルヒンは、白系ロシア人で、国籍があいまいである。だから、巨人軍の正力松太郎にひきずられるように無理やり入団させられた、という話も残っている。スタルヒンについて、改めてかれの業績について検証するべきではないだろうか。巨人軍にいたころには、「スタ公」などと呼ばれ可愛がられた、という話とパシリに便利屋扱いされた、という話もある。もっとも若いからやむをえないが。

戦後、戦争に行っていた野球選手が帰国し、セントラル・リーグとパシフィック

ク・リーグとにわかれた。当然セ・リーグに人気がある。巨人、阪神などがのこって戦前からのファンがいるからである。スタルヒンは、巨人の誘いにのらず、スタ公と可愛がってくれた藤本定義監督のいるパ・リーグに入団した。しかも弱小球団である。最後はトンボユニオンズなどととてつもなく弱い球団に所属した。しばらくして球団は消滅せざるをえなかったのだが、結局両リーグともに6球団ずつになった。しかし、スタルヒンの凄さは、その弱小球団に所属し10年間で100勝以上あげ、球界初の300勝投手になったことである。

300勝をあげるのに600試合もかかっている。400勝投手の金田正一でも1000試合以上かかっているのである。300勝以上上げている選手は、別所毅彦、鈴木某、小山某、米田が350勝。金田が400勝、まあよれよれの晩年だった。(ちなみに大リーグでは511勝のサイ・ヤング、ジョンソンの417勝が図抜けている。)

球速については諸説あって、なかなか一致しないが、小西得郎さんは「金田君が一番速かったんじゃない？」と語った。しかし、尾崎行雄、山口高志、江夏豊、稲尾和久などなど、枚挙に暇がないが、スピードガンで測定したわけではないから、判断し難い。ボクは残念ながら金田の昭和20年代のボールの記憶がないから、なんとも言い難い。ボクの印象に残っている投手は、山口高志である。ナイターで投げたボールが糸を引くように残像の連続で見ることができた。その後、速球投手を何人もみてきたが、あのように糸を引くような映像はみたことがない。稲尾が語ったことだが、すべての速球投手はいずれ技巧派に変身せざるをえない。唯一の例外は尾崎だ。尾崎自身は、160km台を投げていた、と言っている。

大谷翔平をみているとわかるだろうが、全力投球をしていても、常に160km台のボールを投げているわけではない。心身ともに快調で、しかも風向きや周囲の環境などによって最高速度が決まる。阪急ブレーブスの上田監督が、「久しぶりに速い高志を見たな」と言ったように、出来不出来があるのが普通である。その振幅が小さい選手ほど優秀な選手だということである。

すでに述べたように、300勝投手は、日本では6人しかいない。今一流投手として認められているのが200勝投手である。(打者では2000本安打)これなら何十人かいる。2~3勝足りない投手で一流といえる投手もいる。たとえば、広島カープに長谷川良平投手がいた。197勝だったか、で引退した。このころの広島は、存続が危ぶまれる弱小球団で、たとえば巨人にいたら250勝どころではなかった

かもしれない。一方で堀内のように、ON（王・長嶋）をはじめとする強力打線をバックにしながら、200勝に到達するのによれよれだったのもいる。この200勝と長谷川の197勝とどちらが球団に貢献したか、言うまでもないだろう。……数字だけでは決められるものではない。

球速の話からずれてしまったが、だれが最も速かったか、などというのは無意味かもしれないが、打者に与える威圧感が違う。スピード以上の影響を与える可能性もあるから、やはり大事である。それに加えて球質（球が重いとか）球の切れがいいとかという表現もある。金田、尾崎、山口、そしてスタルヒン。さらに大谷。今後も期待できるのは、現在のところ大谷だけである。

2016.09.30.